我妻榮記念館だより

▲会場いっぱいの聴講者

▶今田館長(右)から花束贈呈

松野良寅氏から今田久夫氏へ

館長バトンタッチ・退任記念講演――

先号でも一部既報のとおり、開館以来10年の長きに亘って館長を務めてこられた松野良寅氏が辞任、後任に今田久夫氏が就任されました。バトンタッチの日は、昨年6月19日の開館記念日。このこともあって、昨年6月30日、開館10周年記念も兼ねて、松野氏の退任記念講演「近現代の架け橋――我妻榮――」を伝国の杜で行いました。その後、会場を上杉城史苑に移し、松野前館長への感謝と開館10周年を祝うパーティも開きました。

松野前館長は、「後世に残る事業を!!」との発想から、出版事業に心を砕かれ、我妻先生の生誕100年記念誌『我妻榮――人と時代――』の執筆刊行をはじめ下記のように10冊を越える叢書を残された。氏には今後顧問の立場で指導を仰ぐこととなりました。

第 5 号

発行日／2003年3月31日

発　行／我妻榮記念館事務局
〒992-0045
米沢市中央3-4-38
TEL 0238 24 2211

我妻榮記念館の開館日

土・日曜日（13時～16時）
月曜日（10時～16時）
（但し、冬期間は変更あり）

TEL〇二三八―二四―二二一一
（管理人 北村宅）
TEL 二二―二三八二〇

我妻榮記念館 出版図書

1、我妻榮先生講演集　一、〇〇〇円
2、ふるさと人物探訪 親と子の郷土史―　一、〇〇〇円
3、我妻榮先生　二〇〇円
4、伊東忠太先生　二〇〇円
5、高橋里美先生　二〇〇円
6、素顔の先人たち　一、五〇〇円
7、海軍王国の誕生　一、八〇〇円
8、我妻　榮―人と時代―　我妻榮先生生誕百年記念誌　四、〇〇〇円
9、自雷子物語　我妻榮先生に学ぶ　五〇〇円
10、春宵よもやま話　郷土史の散歩道　五〇〇円
11、ふるさと明治の曙　五〇〇円
12、古稀の細道　五〇〇円
13、先人、大いに語る　一、〇〇〇円

米沢の風土

館長 今田久夫

我妻榮先生の愛弟子である遠藤浩先生（学習院大学名誉教授）は『追想の我妻榮―険しく遠い道』に「米沢の風土から」と題して、「（米沢は）冬になると日本でも有数の豪雪地域として、屋根近くまで雪が積る。（中略）吹雪の日などは眼もあけられない。耳が切れるように冷い。冷いというより痛いといった方が当っているかもしれない。それも三月・四月になると、黒い大地が顔をだし、やがて青々とした緑が周囲を包む。

私は（我妻榮）先生のもっておられた温和さ、きびしさ、辛抱強さ、明るさ、そうした性格がこうした米沢の風土と何か関係があるような気がしてならない。先生の脳裏には、あの山、あの川がいつもきざみつけられるようにあったのではなかろうか。」とのべられている。

また、先日知人から東北電力㈱発行の『白い国の詩』一月号をいただいたが、そこに「東北の哲学・文学風土」のテーマで、中央大学名誉教授木田元氏（哲学者）と長部日出雄氏（作家）の対談が掲載されている。

木田氏が「日本では山形県と長野県の研究者が一番多い。」という話を東北大学におられたドイツの哲学者クラウス氏にしたところ、〝それは雪が多いからだろう。ドイツでも雪の多い地方は哲学者が多く出るという、昔からの言い伝えがあるんだ。〟といっておられた。「雪国では冬じゅう家の中に閉じこめられるから、ものを考える機会が多くなるということがあるかなと思います。」といわれる。

さらに木田氏は山形県において思想家が特に庄内と米沢に多いのは、江戸時代庄内藩の藩校致道館、米沢藩の興譲館の教育政策が優れており、その成果が百年後、二百年後に現れてきたのではないかと考察されている。

両者に共通して〝雪国の風土〟があげられ、そこに多くの研究者が輩出したという指摘は興味深く、かつ注目しなければならない。

次に『風土―人間学的考察』を著した倫理学者和辻哲郎の「風土論」を考えてみたい。

和辻哲郎は自然（気候・気象・地質・地味・地形・景観など）に関わりながら存する民族的生の特性（国民性）を三つの文化類型―東アジアにおける「モンスーン型」、西アジアの「砂漠型」、ヨーロッパの「牧場型」としてあげている。

日本は〝受容的・忍従的〟特性をもつ「モンスーン型」にはいるが、中国沿岸地方と異なり「しめやかな激情、戦闘的な恬淡」さらに「距てなき結合、しめやかな情愛」という日本独自の共同体的心性をもっていると主張する。

確かに、米沢の風土にも「モンスーン型」の受容的・忍従的特性があてはまると思うが、「しめやかな激情、戦闘的な恬淡」や「距てなき結合、しめやかな情愛」についてはどうであろうか。直ちには首肯しがたい。今後、米沢の社会的・文化的環境について歴史的考察を進めたいと思っている。

14年度の日誌から

4/12 補修工事（屋根洗浄）
4/14～4/16 補修工事（屋根ペンキ塗装）
5/5 火種塾開催
5/24 興譲小三年生研修来館
5/28 記念館運営委員会
6/23 自賠奨学財団清掃奉仕と「我妻榮先生に学ぶ会」開催
6/30 開館十周年「記念講演会」（松野良寅）（仏国の杜 二階大会議室）「我妻榮先生を偲ぶ集い」（上杉城史苑）
6/30 「記念館だより」第四号発行
7/7 火種塾開催
7/11 山形裁判所修習生来館
8/8 押入修理
8/31 神田倉 管理人が退任
9/1 後任に北村清彦就任
9/1 火種塾開催
9/15 ホームページ開設（http://www.9.ocn.ne.jp/~wsakac）
9/21～9/23 資料整理（四氏来館）
唄 孝一先生（東京都立大名誉教授）小沢直子先生（明治大・民法・博士課程）高野良彰先生（山形大人文学部助教授）藤巻和広氏（日本医師会地域医療第二課課長）
9/24～9/25 障子張替
9/28 司法研修所修習生及び教官（木納敏和判事）一行来館
10/4 仙台高裁一行二名来館
10/21 我妻榮先生没後満29年
10/21 王書江氏（中国政法大学日本法研究者）、殷建平夫人来館（東大名誉教授星野英一氏の紹介）
11/3 火種塾開催
11/18 トイレ水漏れ修理
12/3 雪囲い
12/21 「記念館だより」創刊号増刷（四〇〇部）
12/28～12/30 臨時休館（年末休館）

平成15年

1/12 火種塾開催
1/16 雪降し
1/20 改装・補修工事に関する打合せ
1/27 TV買換え
2/13～2/21 改装・補修工事（押入、蔵と母屋の接合部内装他）
3/1 我妻榮名誉館長来館
3/2 火種塾開催
3/3 内装工事（押入の床にクッションフロアー貼付）
3/20 上杉記念館の我妻榮先生お手植えのシロウメモドキに看板設置及び記念館の玄関の上の看板の手入れ
3/22 唄先生の寄稿文を抜き刷りし小冊子にする
3/31 「記念館だより」第五号発行

「我妻榮夫妻お手植えの木」の標柱を建立

昭和45年、上杉鷹山入部200年を記念して、米沢郵便局では「頌徳定額貯金」を発売した。このことを記念し、郵便局では我妻榮夫妻を招き、10月17日（貯蓄の日）に「白ウメモドキ」2本のお手植えを願った。当時その標柱があったが、数年で朽ち果てて無標示になっていたことから、このほど我妻記念館の事業として建立したもの。ところは、上杉記念館庭園の、この場所（右写真）ですが、おわかりかな？

我妻名誉館長、博物館視察

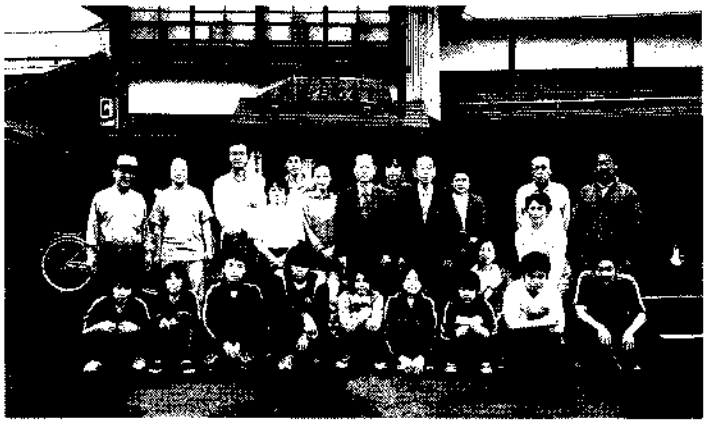
児童文化賞の表彰式に臨まれた我妻堯名誉館長は、その足で上杉博物館を視察。先人顕彰コーナーで、父親と対面。

我妻榮児童文化賞も10回に

米沢児童文化協会（高森務会長）が主催する我妻榮児童文化賞の表彰式が3月1日㈯にホテル・サンルートで開かれた。ことしは、我妻名誉館長も東京からかけつけられ、祝いの言葉を述べられた。ことし受賞したのは、広幡小5年の色摩友佳さんと第二中の吹奏楽部。関係者らが我妻名誉館長（前列左から3人目）を囲んで記念撮影。

自頼奨学生親子で館内外の清掃奉仕

毎年6月の日曜日、我妻榮が文化勲章の褒賞金をもととして母校興譲館高校に設立した㈶自頼奨学財団の奨学生ら親子が、清掃奉仕に当たってくれています。昨年は6月23日のことでした。汗をぬぐってから、ハイ、パチリ。



若者に何らかの刺激になれば

開館10周年によせて

名誉館長　我妻　堯

開館十周年諸行事の折、やむない事情で臨席できなかった名誉館長から、次ぎのようなメッセージをいただいております。氏は、目下国際厚生事業団（厚生労働省の外郭団体）参与並びに(財)国際協力医学研究所振興財団の理事として活躍しておられます。

歳月の経つのは速いもので、我妻榮記念館も創立以来十周年を迎えたとのこと、設立当時を含めてそれ以来、様々なご配慮を頂いた皆様方に心からお礼を申し上げます。本日はよんどころない用事で出席できませんので、書面でご挨拶させて頂きます。亡父、我妻榮はふるさとの米澤を心から愛しておりました。晩年になってたびたび米澤を訪れるようになった頃は勿論ですが、私が子どもの頃から、毎日の生活の中に米澤と関係のあることがしばしば家庭の中の話題になり、今になって思い出すことが沢山あります。

私は最近、暇があると良く軽井沢に参ります。特に昔の軽井沢には東京と異なり、米澤に似たようなところがいくつかありました。即ち当時の周辺の村々では養蚕が盛んで桑畑が多く、また佐久の鯉といって鯉は当時から有名でした。

あちこちに沼や池があり鯉や鮒を釣りに行くことが出来ました。私も子どもの頃には毎夏、父のお供をして鮒や鯉を釣りに行ったものです。その頃の父は、多分自分が子どもの頃に祖父、又次郎に連れられて米澤の川か沼に釣りに行った頃のことを思い出していたのだと思います。鮒が沢山釣れた時には、自分で全部さばいて串に刺し、囲炉裏（別荘ですから薪を焚くのではなく炭火でした）の炭火の周りに立てて乾燥させ、さらに天日に干してから、煮付けをこしらえておりました。鯉が釣れない時には、母に町の魚屋に行って鯉を買わせ、自分ですべて料理をし、洗いや鯉こく、甘煮が夕食の食卓に並びました。

このような父の思い出のつまっていた軽井沢も、戦後は近代化の波に飲み込まれ、桑畑はテニスコートに変わり、釣りをした沼はどこを探しても見つかりません。

先日、虎ノ門の近くのビルで、米澤の「物産展」が開かれましたので、早速に出かけて「鯉のうま煮」と「ドこんにゃく」を買って参りました。父の思い出の中に「ドこんにゃく」はありませんが、両方とも大変美味しく頂きました。私も半分は米澤人になったのかと考えております。

散漫なお話しになりましたが、時代の流れの中で農村の都市化が進み、いたる所で開発が進む為に昔の思い出に浸ることが難しくなっている今日、父が青春時代を過ごした家屋を記念館として保存して頂いたことを心から感謝致しております。願わくばこの記念館が米澤の若い人々の心に何らかの刺激を与えるきっかけになれば、父にとっても望外の喜びになるかと存じます。

終わりに、本日お集まりの皆様方のご健康と米澤の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

医療事故の鑑定書集を出版

我妻堯名誉館長

産婦人科医の立場から我妻堯氏は昨年十二月、『鑑定からみた産科医療起訴』を出版（日本評論社）しました。

この内容について、一月三十一日の朝日新聞「ひと」の覧で紹介されています。このなかで、氏は「面倒な作業を引き受けてきたのはDNAのせい。門前の小僧で法律になじみがあったから……」と。

定価九四〇〇円プラス税。

記念館の年予算約二〇〇万円

記念館の管理運営のための予算は、毎年約2百万円です。

収入の殆んどが、米澤有為会からとなっています。因みに15年度の支出の主なものは、事業費が33万円、管理運営費が百25万円、施設整備費が27万円、その他となっています。

看板を塗りかえました

玄関の上屋根に掲げてある「我妻榮記念館」の横看板は開館以来のものです。すっかり色あせてしまいましたのでお色直しをしました。見違える程になりましたから、通りすがりにごらんください。

テレビも更新しました

開館記念に吉宮工業さんから寄贈を受けた大型テレビも、十年が過ぎて元気がなくなりましたので、これ又新しく購入しました。我妻榮を紹介したものはじめ郷土ゆかりの先人のビデオが多数ありますので、ごらんください。

記念館のスタッフ

名誉館長　我妻　堯
顧　　問　松野良寅
館　　長　今田久夫
事務局長　小関　薫
運営委員　遠藤拓・川野希・佐藤英男・佐野清一・木多和彦
管 理 人　北村清彦

米沢市名誉市民

伊東忠太の世界展

4月12日～8月31日まで
ワタリウム美術館（月曜休館）
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-7-6
☎03-3402-3001
入館料　大人　1000円　学生　800円